

自分を信じてくれる人がいる。だから頑張れる…

伝えたいこと 椋鳩十

「彦穂さん、少年向けの作品を書いてみないか。」
その一言が、久保田彦穂の心を揺り動かした。

中学校時代の恩師の影響を受け、文学の道を夢にみて人生を歩き出した彦穂青年は、法政大学に入学し、小説や詩を書き始めた。

幼い頃に南アルプスの麓で、美しい自然に囲まれて育った彦穂は、その大自然の中でたくましく生きる人々を主人公とした小説を書いたのだ。

彦穂の小説は、裕福ではないが、自由でたくましい山の民を題材としたものが多く、その力強く生き生きとした姿は、当時の文学界で高い評価を得ていた。

しかし、その頃の日本は、中国との戦争中で、自由をえがく彦穂の作品は、「国民みんなが国のためにがんばらねばならない時に、『自由』だなどとはけしからん」という理由で、発行を禁止されてしまった。

「軍部が喜ぶような小説なんか書くもんか！」そういつて彦穂は小説を書くことをやめてしまった。彦穂の家庭は、日増しに生活が苦しくなっていた。

当時、彦穂の才能を惜しんだ『少年倶楽部』の編集長だった須藤憲三は、「よい作品を書くためには、力をためることも大切だ。今はそのための時間なんだ」といつて『念け賃』というお金を彦穂に渡し、生活の援助をしてくれた。

そして、ある日

「彦穂さんの作品は動物と人間との心の交流がよく描かれていて、すばらしい。ぜひ少年達にそのことを教えてほしい。」と、児童文学を書くことを勧めた。

初めは、「子供向けの物語なんて…」とあまり乗り気ではなかった彦穂だったが、小学校の時に読んだ「アルプスの少女」から受けた感動や、小さい頃体験した自然の美しさを思い返し、「よし、今度は私が子どもたちに感動を届けよう。」と、自然や動物を題材とした児童文学を書くことを決意した。

それからの彦穂は、「自分は、まだまだ動物のことを知らない。」「自然の姿をもっと知りたい。」と考え、自ら家で生き物を飼ったり、山々に、自然を観察に行ったりと、創作活動に没頭していった

そして、『山の太郎熊』を皮切りに、次々に動物を主人公とした作品を発表した。自然や動物と人間の温かい心の交流を描いた彦穂の作品は、少年のみならず、多くの人々の心を打ったのである。

また、彦穂は、物語を書くとともに、「青少年に多くの本と出会わせたい。」と、各地で図書館設立に力を尽くした。さらに、「家庭で親子がともに読書をする」ことで心が育つ。『親子二十分間読書』活動の推進に努めた。この運動は、鹿児島県から、やがて日本全国に広まっていった。

私たちの住む加治木町に、彦穂の功績を讃えた記念館がある。
「彦穂」こと「久保田彦穂」とは、椋鳩十先生の本名なのだ。

原案 鹿児島県教育委員会『不屈の心』「伝えたいこと」



椋鳩十（久保田彦穂）



椋鳩十記念館（加治木町）



作品を書いていた部屋（復元）



椋鳩十の作品